

# 歴史的な地方小都市における地域特性を考慮した伝統的建造物の活用に関する研究

—兵庫県たつの市龍野地区を事例として—

西村 和

[指導教員：武庫川女子大学准教授 山田 由美]

## 1. 研究の背景と目的

地方小都市における少子高齢化や都心への人口流出は、地域の活力の低下を招くだけでなく、地域の町並みを構成する建造物の維持・管理にも影響を及ぼしている。管理者が居なくなった伝統的建造物は急速に老朽化し、最終的に取り壊されると歴史的価値のある町並みの消失を招きかねない。

歴史的な町並みが残る地方小都市に共通しているのは、地域独特の産業、文化、歴史とそれらと密接な関係にある伝統的建造物群の存在であり、地域の特性を表す建造物群は、そこに行かないと見ることが出来ない、体験できないものである。これらは、地域に人を呼び込むための目玉となり得、地域ブランドの創出にもつながり、加えて地元住民にとっては、町の活性化を目的とした行事の会場として使うことが多く、地域コミュニティを強化するうえでの拠点となっている。このような地域の資源としての伝統的建造物を活用することは、地元住民にとっては町の魅力を再認識し、誇りを持つことで地域に活力をもたらすことにつながる。さらに地域外の人々にとっては町に興味を持つきっかけとなり、観光客として訪れ、町の魅力を認識すれば移住者として定住する可能性にもつながる。町が活性化し定住者が増えれば、さらなる既存ストックの活用が進み、伝統的建造物の維持・管理の促進につながる可能性があると考えられる。

以上のような考えに基づき本研究では、兵庫県たつの市龍野地区を事例とし、龍野地区の魅力を引き出す地域特性を明らかにし、その特性が伝統的建造物の活用に及ぼす影響を考慮したうえで活用の課題と方向性を探ることを目的とする。なお魅力のもととなる地域特性は、「居住環境」「コミュニティ」「町の景観特性」「町の観光」「住民活動などの町の活性に向けたムーブメント」に着目して研究を進めた。

## 2. 既往研究と本研究の位置付け

これまでの伝統的建造物の活用に関する研究では、店舗活用、イベント時の活用に関するものは多い。本研究では、これらの活用事例が必ずしも定住人口の増加につながっていない点に着目し、伝統的建造物を生活の場として利用する度合いが高い地方小都市では、地域特性が定住を含めた持続的な活用の指標となり得ると考えた点において独自性を持つ。

## 3. 研究方法

対象地域の現状把握のためフィールドサーベイを行い、地区内に残存している伝統的建造物および伝統的家屋と、その

キーワード：伝統的建造物、町並み、地域特性、保存、活用

うち空家となっているものを把握し、地区内に内在する活用対象となり得る伝統的建造物の残存状態を整理する。次に、対象地域の地域特性を明らかにするため、伝統的建造物所有者・居住者への聞き取り調査と過去にまちづくり協議会が行った龍野地区住民に対するアンケート調査（2011年）の分析をとおり、龍野地区住民の町の居住環境に対する意識を明らかにする。また地区内の来場者の多い2つのイベント（龍野アートプロジェクト、オータムフェスティバル in 龍野）時に行った来訪者へのアンケート調査をとおり、来訪者が認識している町に対するイメージや評価から、龍野地区の魅力や地域特性を明らかにし、そのなかから評価の高かった項目について新たにフィールドサーベイを行い、その評価要因の分析を行う。以上から得られた知見より、伝統的建造物の活用を促進するうえでの課題を明らかにし、そのうえで地域特性を考慮した活用の方向性を考察する。

## 4. 龍野地区の地域特性

### 4-1 町の居住環境

(1) 伝統的建造物の居住者の高齢化 龍野地区における伝統的建造物、伝統的家屋の居住者には65歳以上の高齢者が多い（図1）。現在はまだ50代、60代を中心とした町並み保存活動が活発に行われているが、次世代への継承が上手い限り、数年先には町並み保存活動が衰退するリスクを抱えている。

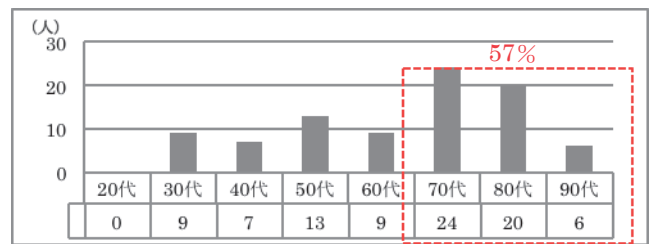


図1 回答者の年齢 (n=88)

(2) 町の魅力 地区を囲む鶏籠山などの山々と地区西側を流れる揖保川がつくりだす自然環境、および伝統的建造物が群になって構成する町並みに対し、住民、来訪者共に魅力的と回答しており（図2）「町の魅力」を構成する重要な要素となっていると考えられる（写真1, 2, 3, 4）。

(3) 買い物環境の整備 地区内の生活環境での課題のひとつは、徒歩圏に食材、日用品を取り扱っている店舗がほとんどなく、買い物環境が整っていない点（図3）である。買い物は主に自家用車を使い、川の東側の大型店舗に行っている住

民が多く（図4）、主として車に依存した生活となっている。そのため地区内には街路沿いの敷地内の一部が車庫として使われ、景観に影響を及ぼしている箇所も増えつつあり、車庫の確保と伝統的ファサードの維持との折り合いが課題である。また、車に乗れない高齢者は、地区内で買い物出来る環境を望んでいるが、一人暮らしの高齢者は買い物頻度が少ないこともあり、固定の店舗にこだわっているわけではなく移動販売に対する受入れ意識は高い。

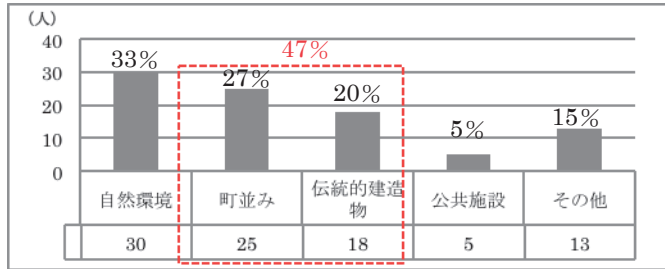


図2 龍野地区の魅力（複数回答可 n=88）

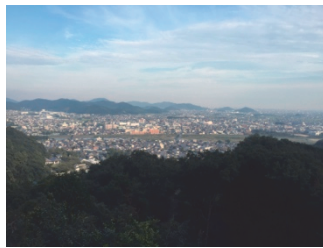


写真1 山麓ゾーン



写真2 武家屋敷ゾーン



写真3 醤油蔵ゾーン



写真4 町家ゾーン

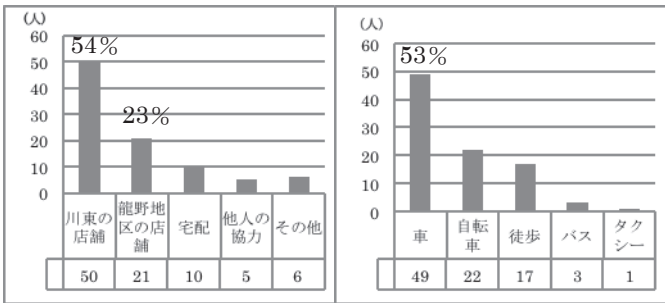


図3 買い物に行く場所 (n=88) 図4 買い物に行く手段 (n=88)

#### 4-2 町のコミュニティ

(1) 地縁に基づくコミュニティの存在 地区内には、古くからの地縁に基づくコミュニティ形成がみられ、近所間での同居世帯の見守り体制がとれている。そのコミュニティが自治会活動の運営の核となっているが、現在、コミュニティの中心となっている世代は50～60代の男性がほとんどであり、

かつてあった婦人会もなくなった自治会も多い。将来の自治会活動の継続を考慮すると、20～40代の住民や女性の参加が必要という意見も多く、若年層や女性の自治会活動への参加を増やす仕組みの構築が課題として住民に認識されている。

(2) イベントの企画・運営を通じたコミュニティの強化 コミュニティ活性化を目的に地区内で実施されている年間イベント17件中10件は、自治会や住民有志により結成された委員会が企画・運営しており、古くからの地縁を核としたコミュニティが町の活性に寄与している様子がうかがえる。

(3) コミュニティにおける伝統的建造物の位置付け 住民は町並みや町並みを形成している伝統的建造物を「町の魅力」としており、誇りに思う人が多く、保存意識も高い（図5、6）。その思いの現れとして、町並み保存活動に対して半数以上が肯定的であるが、高齢化による活力の低下により、実際に保存活動に参加しようとする人は高齢者ほど少ない。さらに町並み保存のためのツールと成り得る伝統的建造物群保存地区制度（以降、伝建制度）への理解は、具体的なビジョンが見えないなどの理由によりあまり進んでいないようだ。しかし、住民主導による地区のイベントでは17イベント中、13件で伝統的建造物が会場として活用されているなど、伝統的建造物は地区内のコミュニティ活動の拠点となり、地域の空間資産として住民に広く認識されている。

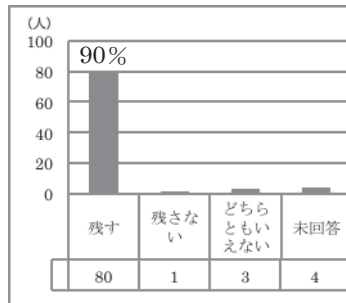


図5 町並み保存意識 (n=88)

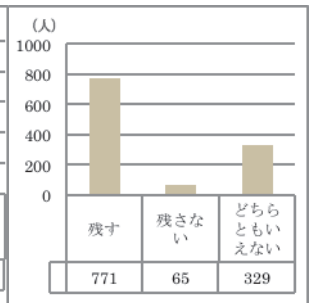


図6 2011年町並み保存意識 (n=1164)

(4) 来訪者・移住者の受入れ体制 観光を通して町を訪れる人、他地域から町に移住するといった外部の人間に対する受け入れは肯定的であるが（図7、8）、外部からの人に対し、住民側が「町の特性をよく理解する」ことを望み、従来の住環境とコミュニティが維持されるかを重視している点が特徴的である。

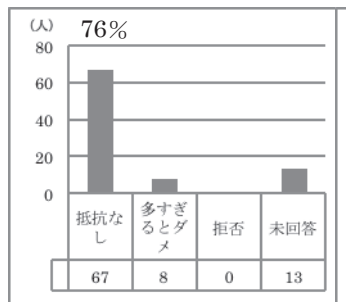


図7 来訪者の受け入れ (n=88)

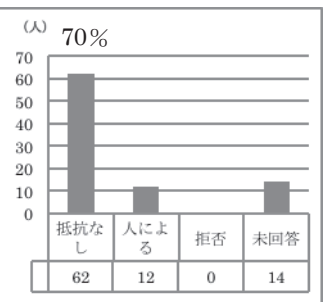


図8 移住者の受け入れ (n=88)

### 4-3 町の観光

(1) 少人数での観光スタイル 住民は観光では「大人数でやって来る」というスタイルではなく、「少人数で散策する」といったスタイルを望んでいる。その考え方は町のイベントの運営にも表れており、自家用車での来訪者が多いにも関わらず、駐車場を町の中心部に設けず、大型バスが駐車できるのは川原町の「観光駐車場」のみという形を取っており、イベント時でも少人数単位での観光スタイルを維持できている。

(2) 観光客のターゲット 龍野地区を代表する2つのイベントの来訪者には中高年の主婦層が多く、母娘連れが多く見られることから、現在は若年層の来訪者が少なくても母娘間を通じて龍野の魅力を伝えて行ける可能性があると考えられる。さらに来訪5回目以上の定期的なリピーターが多いことから、これらのイベントには長期的な継続が期待できる。

(3) 観光客の長時間滞在に向けての工夫 様々な催しが開催されているイベント時でも滞在時間は半日までであり、宿泊を伴うような観光スタイルにまでは行きついていない。これは町の規模によるところが大きいと考えられ、観光に対応した施設数を増やそうにも限りがある。したがって、観光施設に依存しない方法での観光客の長期滞在に向けての工夫が必要と思われる。

(4) 海外アーティストと伝統的建造物のコラボ 龍野アートプロジェクトでは、龍野地区出身のアートプロデューサーの活躍により、海外アーティストの招聘を可能にしている。海外アーティストを招聘し、伝統的建造物を会場とすることで、龍野地区の魅力を国内だけでなく国外にも発信することが期待できる。

(5) 醤油蔵の大空間の活用 醤油蔵は来訪者から「町の魅力」のひとつとしてとらえられている。今回のアンケートからはその魅力の詳細を明らかにすることは出来なかったが、過去のアートプロジェクトでは、蔵の天井が高くボリュームの大きい空間特性を活かした展示や催しが行われた実績がある。

(6) 地元食材の魅力 龍野地区は広く「醤油の町」として認識されており、オータムフェスティバルでは醤油を加工した食材に人気がある。

### 4-4 町の景観

アンケート調査から、町並みに対する満足度(図9)と訪れた場所(図10)の相関関係を分析した。

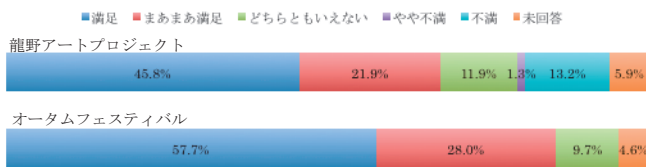


図9 町並みに対する満足度

(1) 地盤の高低差が創りだす眺望の変化 町並み評価の高かった場所をつないだ赤のルート(図10)は、山手の山麓ゾーンから商家町であった町家ゾーンに至る形になっており、

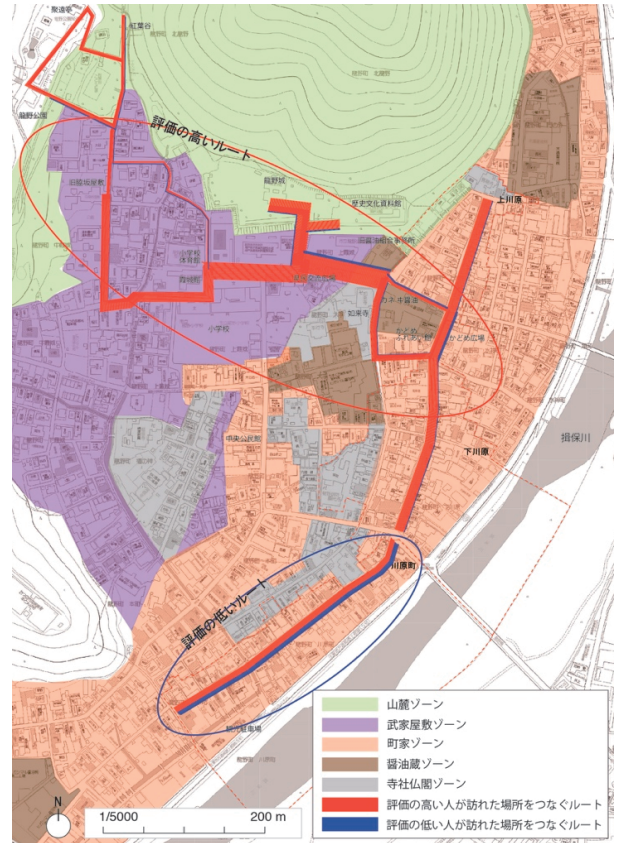


図10 訪れた場所の相関関係

地盤の高低差が24.4mと大きい。その高低差がつくりだす遠景から中景、近景へと変化する景観の移り変わりが町並み評価を決定づける要因のひとつとなっていると考えられる。

(2) 町並みへの評価と評価要因 同様に赤のルートは、たつの市の景観条例で区分されている山麓ゾーン、武家屋敷ゾーン、寺社仏閣ゾーン、醤油蔵ゾーン、町家ゾーンの5つのゾーンすべてを貫く形になっている。それぞれのゾーンごとの特徴は、街道沿いの歴史的建造物の意匠に表れており、景観の変化の違いが町並み評価を決定づける要因のひとつとなっていると考えられる。評価の高いルート沿いでは、伝統的建造物が鉄筋コンクリートなどの現代的な構造形式の建物に建て替わっても、本瓦葺や格子などの伝統的デザインコードを継承していたり、土塀などの街路沿いの景観要素を残している箇所が多い。一方で、評価の低い人が訪れた場所をつないだ青いルート沿いの空地と伝統的建造物を地図に落とし込むと(図11)、伝統的建造物の隣に空地がある箇所が多く、伝統的建造物の未修景の外壁が街路から露わに見える。

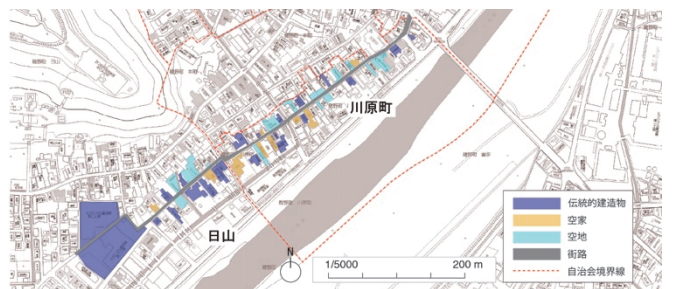


図11 未修景・空地の多い街路

(3) 辻まわりの特性 龍野地区にはT字路やL字路だけでなく、辻の部分で道路幅員が変わったり、方向がずれたりする城下町特有の先が見通せない形状の街路が多い。したがって、どの方向からアクセスしても道の交差点となる辻の部分でアイストップとなる建物や景観要素となる建造物に目が行く。町並みの評価が高い赤いルートには、特徴的な辻が9箇所(図12, イ〜リ)あり、うち4箇所の角地に修景されていない伝統的建造物があった。評価の低かった青いルート中には、全ての辻において角地に修景されていない伝統的建造物があった。この辻における角地のあり方が、町並み評価を決定づける要因となると考えられる。

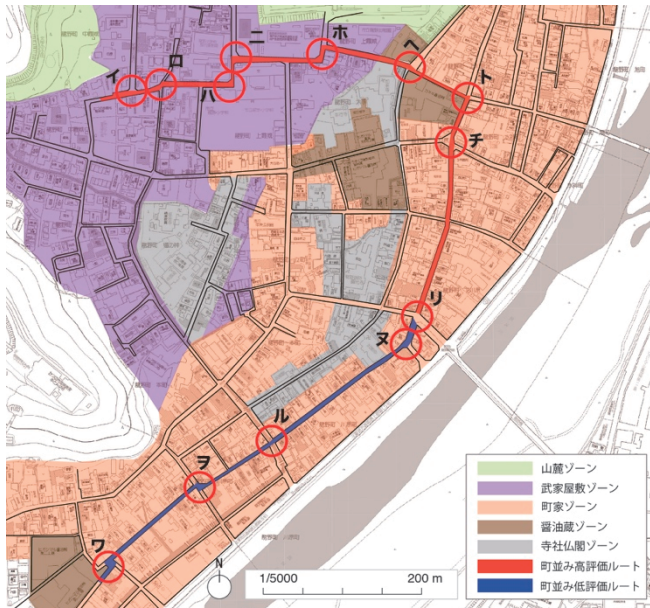


図12 未修景・空地の多い街路

## 5. 結論

以上の分析で得た知見をもとに、龍野地区において伝統的建造物を活用する上での課題と方向性について考察する。

### 5-1 景観形成のための課題

(1) 空地まわりの修景 町家ゾーンにおいては、連続する建造物群が町並みの主要素であるため、空地による連続性の分断は町並みの評価を下げる要因となる。街路沿いの主な空地は駐車場として利用されている箇所が多いため、格子をめぐらせる、門扉を設けるなどの対策をとることで町並みへの影響を最小限に抑えるなどの、空地周りにフォーカスした修景が課題である。

(2) 角地にフォーカスした伝統的建造物の修景 雁行した辻においては、角地における建築物が町並みを決定づける要因となるため、角地周りを重点的に修景することが課題である。

(3) 伝統的デザインコードを現代的技術で再生 伝統的建造物を元のまま残すよりは、町並みが持っている特性を良好な形で継承することが重要で、新しい建築技術を使い、再生することが良好な景観を残すうえでの選択肢のひとつとなる。

### 5-2 龍野地区での伝統的建造物活用の方向性

(1) 伝統的建造物の体験居住及び体験店舗 「住」の用途だけでは町の活性化・発展にはつながりにくく、来訪者の獲得につながる伝統的建造物を活用した店舗利用を推進していく必要があると考えられる。店舗への活用を龍野地区の地域コミュニティの活性と持続的な定住につながるためには、貸し手と借り手の間に立つ仲介者のマネジメント力と借り手の地域コミュニティに対する理解と努力が必要となる。また借り手のマッチングミスを避けるためにも、伝統的建造物の体験居住・一時貸しの仕組みで移住者の起業と生活を支援することは有効であると考えられる。

(2) アーティスト in レジデンス 龍野地区では地元出身のアーティストに海外とのコネクションがあることから、日本国内を超えて、海外に龍野の魅力を発信できる術が存在する。また、現在は利用されていない醤油蔵や醤油工場は空間のボリュームが大きく、大作の創作にふさわしい空間であるとともに伝統的建造物の空間的魅力が創造力を引き出すきっかけにもなり得るため、アーティストの創作の場と居住をセットとしたアーティスト in レジデンスの仕組みを提案する。

(3) 教育機関のサテライトキャンパス 現在、地区内では伝統的建造物を活用した店舗の運営や保存に関する課外授業を龍野北高等学校(地元の実業高校)と連携して行っている。その実績から、高校や大学などの教育機関と連携した活動の拠点としての活用が期待できる。教育機関としての活用は町の活性につながるだけでなく、地区内で教育を受けた学生達が将来、まちづくりの担い手として活躍することが期待できるため、持続的な地域活性にむけての有効な手立てである。さらに若者世代に郷土愛、地元愛を醸成することで、将来の定住促進につながると考えられる。

(4) 日割り貸しの仕組み 町の買い物環境改善のために、伝統的建造物を日割りで移動販売の拠点として賃貸する仕組みを提案する。利用用途は、食材や雑貨などの店舗だけでなく、茶道・華道・俳句などが培われてきた町の文化的背景から、趣味・稽古事の教室での需要も期待できる。

### 5-3 今後の課題

文化庁の伝建地区制度の活用により歴史的町並みを保存・維持している地方小都市が多いなか、龍野地区は地方自治体の制度と地区住民の努力だけで現在の町並みを維持してきた地域である。本研究では、伝統的建造物の活用の可能性を探る上で地域特性に着目したが、今後は、住民主導の地域活性のモデルケースとしてその動向をフォローしていきたい。

### 参考文献

- ・兵庫県: あすの景観をつくるたつの市龍野地区歴史的景観形成地区景観ガイドライン, 2015
- ・(社)兵庫県建築士会龍野支部・まちづくり委員会: 龍野の町並み 2009, 2009
- ・大場修: 龍野の建築, 龍野市, 1987